# 大阪学院大学 外国語論集

# 第71号

Gene Wolfe "The Death of Dr. Island" 再考 "The Death of Dr. Island" とは何か

...... 山口 修 1

### 抄訳 解説

パメラ・ジェーンズ著

『シェパーズ・ブッシュ――ディケンズとのつながり』後半

……… 永 岡 規伊子 19

平成 28 年 6 月

大阪学院大学外国語学会

# 大阪学院大学 外国語論集 <sup>第71号</sup>

平成 28 年 6 月

大阪学院大学外国語学会

# Gene Wolfe "The Death of Dr. Island" 再考 "The Death of Dr. Island" とは何か

山 口 修

序

Gene Wolfe は "The Death of Dr. Island" というタイトルについて、"'Death,' as I saw it, could be handled in two ways: Dr. Island could die, or Dr. Island could decree a death" (Wolfe 2009, 158) と述べる。作者による自作の解釈をどのように評価すべきかという問題はあるが、確かにこの作品のタイトルは二つの解釈が可能である。後者"decree a death"が Ignacio の治療のために Dianeを犠牲することを指していることは間違いない。では、もう一つの"Dr. Island could die"はどのように解釈すればよいだろうか。物語冒頭の Gerald M. Hopkins の詩と、最後に博士の詠う芭蕉の句は、この問題を解くための手がかりを与えているように思える。Dr. Island は Nicholas との交流を通じて、人類への安住の場の提供という役割を意識しながらも自己の死を自覚するに至る。本論では、二つの引用が創り出すコンテクストを解釈の手がかりとして、Nicholas との関係から生じた Dr. Island の変化を考察し、拙論で提起しておいた問題<sup>1</sup>、"The Death of Dr. Island"というタイトルの意味を考えてみたい。

1

まず最初に、二つの引用について見ておこう。Hopkins の詩の原文は、以下の通りである。

# Heaven-Haven A nun takes the veil

I HAVE desired to go
Where springs not fail,
To fields where flies no sharp and sided hail
And a few lilies blow.

And I have asked to be
Where no storms come,
Where the green swell is in the havens dumb,
And out of the swing of the sea. (19)

上に示したように、原文には"Heaven-Haven"というタイトルがついており、冒頭に"A nun takes the veil"という一文が置かれている。またこの詩の第二連は、Hopkinsの原文では"the havens dumb"となっているが、Wolfeの引用では"the heavens dumb"に変わっている。これら省略、変更された部分を補って原文を解釈すると、精神的安住の場を求めて修道院に入ることを決意した女性の詩ということになるだろう。しかし Wolfe 版では、語句の削除、置換によって、この詩の解釈の幅が広がっている。例えば、女性が求めるキリスト教的な天上の楽園のイメージが薄れ、雹や嵐が象徴的なものから物理的、現実的意味合いをもつような解釈が可能になる。また"the heavens"とすることで、Nicholas たちのいる宇宙空間そのものを指すという解釈もできる。"Even among the inner planets space is not a kind environment for mankind; and our space, trans-Martian space, is worse"(107)と博士がいう過酷な宇宙空間にあって、博士の提供する環境がいかに理想の安住の場であるかを強調することになる。

一方芭蕉の句は、この句に関する日本人研究者たちの解釈を記した Basho and His Interpreters (1992) では、"loneliness of travel"、"a broad depiction of rough waves"、"sad thoughts of Sado Island"、"awareness of man's everlasting sadness"、"the grandeur of universe as well as the insignificance and solitude of man" (260) といった言葉で評されている。このような一般的な解釈からは、Hopkins の詩の「安住の場」というイメージをこの句に見出すことはできない。嵐を回避する安全地帯としての港のイメージとは逆に、荒波という言葉が自然の苛烈さを強調するとともに、深閑とした天の河によって人間の孤独が強調されているように思われる。佐渡島が流人の島であったという歴史的事実まで考慮に入れると、広末保らが「限りなく深い封建時代の民衆の悲しみが、力強い響で形象化されている」(143) とする解釈も可能になり、博士の島で行われている行為をも暗示していると捉えられるだろう。

作品中で引用されているのは、Peter Beilensonの訳と思われるが、この訳とその他の訳との間には違いが見られ<sup>2</sup>、ここでは「荒海」に"wild"が、「天の河」には"silent"という語が使用されている。作品後半では、博士の様子が"A wave higher than the others"(126)、"crashing waves"(128)と描かれ、その内部で荒々しく動く感情が、この句の"wild"と対応し、博士の声も"wild"と表現される。また"silent"は、"We will call you Kenneth, silent one"(130)、さらに最後の一文"There was no reply"(130)とも呼応し、Nicholasが消された後の衛星の静けさ、博士の孤独、悲しみを表す。このように二つの引用において、博士の「安住の場」の希求から「孤独」、「寂しさ」、「悲しさ」の認識へという作品の解釈を方向づけるコンテクストが示されているのではないかと考えられる。以下、このコンテクストを基に作品を見ていきたい。

自分はこの天体そのものであり、人類の思考の全能性への願望であり、人間の 意志を反映させることで理想の環境を提供していると述べる。一方で、詩を口 ずさみ、最後の場面では激しく感情を露わにする。このような博士の言動を見 ると、おそらく人工知能である博士は、人格を備えた存在であるかのようだ。 以下、本文の理解を深めるために、博士を人格をもつ存在と考えておきたい。

博士の説明では、この世界の人々の多くが"sensitivity" (106) を失い感情障害をおこし、社会全体が"advance" (106) できなくなっている。そのため、博士は社会の中で"functioning" (95) しなくなった人間を理想の環境であるこの島に連れ戻すことで、彼らを正常にし社会復帰させている。Ignacioが治療対象となっているのも、"Ignacio seems to me to hold a brighter promise of a full recovery coupled with a substantial contribution to human progress" (107) と博士がいうように、人類を再び進歩させるのに必要だからだ。つまり、合理主義に基づいて進歩する社会こそ人類の安住の場だと博士が考えていることを示している。

では、博士は Ignacio のどのような能力を重視したのだろうか。アマゾンで育った Ignacio は火を扱う能力、やすの作り方といった自然の中で生き延びる野生の力をもっている。また、魚のえさとして水槽に入れられる金魚についての"Brave goldfish, you have been cast to the monster, will you be the one to destroy him? Destroy him and you shall have his diamond house forever" (116) という語りからは、Ignacio の"sensitivity"が感じられる。殺人癖をもつ Ignacio らしい不穏な語りではあるが、金魚への感情移入した語りかけは、"sensitivity"がなければ難しい。また、これらの言葉は進歩する意識を失いかけた社会への語りかけでもある。同時に、Ignacio のために犠牲にされようとしている Nicholas への語りかけとも読める。これらの点から、野生の力と"sensitivity"をもつ Ignacio は、人類を活性化するのに役立つと考えられた。理想的環境で Ignacio を治療し、社会復帰させ、停滞する社会を再び進歩させることが博士の役割であることがわかる。

3

Nicholas は、Joan Gordon が "rehabilitative device" (62) と呼ぶように、Ignacio を治療するための道具として連れてこられた。当初博士は、自分がNicholas の友人であることを強調する一方で、Nicholas をたびたび殺そうとする Ignacio と接触するように促す。これは治療のためと称して弱者の意向にかかわらず強者が弱者の利益を強調して介入するパターナリズム的思想に基づく行動であり、博士が Nicholas を Ignacio 治療の道具としてしか見ていなかったことを示す。だが、博士は最終的に Nicholas を治療対象と見なすようになる。それはどうしてだろうか。Nicholas に対する変化が、博士自らの変化を引き起こすことになるのだが、以下その点を考察していこう。

博士が Nicholas を治療対象とするようになった理由として、この島での Nicholas の精神的成長が挙げられる。最初 Nicholas は、他者とのコミュニケーションに問題を抱えていた。この島でも、上述の拙論で述べたように、博士の「言語ゲーム」への参加を拒否し反抗の態度を終始貫く。自分の意思にかかわらずこの島へ突然連れてこられたことへの不満、芹沢俊介のいう「根源的イノセンス」に加え<sup>3</sup>、機能していないから Diane の治療は不可能だとする博士への怒り、不信感しか Nicholas にはなかった。だが、博士とのコミュニケーションを拒絶する一方で、Nicholas は Diane や Ignacio と接し、精神的に様々な影響を受け成長していく。彼らとの遭遇で Nicholas はどのように変化していったのか、またその変化が Dr. Island にどのような影響を及ぼしたか、具体的に見ていこう。

Diane と出会ったとき、この衛星に放り込まれたばかりの Nicholas は "he was lonely now" (86) とあるように孤独を強く感じていた。彼は Diane から子ども扱いされることを嫌がり、彼女への苛立ちを見せるが、Diane も疎外された存在であり自分と同じ立場であることを知る。そして Nicholas は、彼女の"I feel better now that I'm with you; you're really nice" (91) という言葉を、疎外され続けてきた自分の存在を肯定してくれるものとして受け取る。そ

の結果、彼は Diane に共感し、彼女を保護しようとし始める。"sensitivity"が "the ability to understand other people's feelings" という意味であると考えるなら、間違いなく Nicholas には"sensitivity"が内在しているといってよい。以降、Nicholas は Diane は病気でないと主張し、彼女自身にもそれを納得させ、彼女を死から救い続けようとする。ここに「保護する / される」という関係が生まれ、Diane の存在が Nicholas に能動的な役割を与えることになる。

一方、Ignacio とのコミュニケーションは、初対面のときから突然殴られたり、その後も殺されかけたりと暴力によって妨害される。しかし物語後半では、Diane から彼がロボットと生活していたことを聞き、自らロボットのふりをすることで Nicholas は Ignacio とのコミュニケーションに成功する。 Nicholas は彼から、魚の捕り方や火のおこし方など、この島で生き抜く方法を教えられる。殺されることを恐れながらも Ignacio とのコミュニケーションを図るのは、直接的には Diane や自分の食料を得るためであるが、Nicholasが自ら生き抜くため、また Diane を救済するためでもある。このように、Diane や Ignacio とのコミュニケーションによって、Nicholas の中に他者への共感が生まれると同時に、社会の中で生きていくのに有用な野生の力を手に入れていく。これこそ博士が Ignacio に期待していたものだろう。

4

このような Nicholas の成長を受け、博士にも変化が生じる。そもそも万能の神のような存在だと考えられる Dr. Island だが、彼は様々な点で矛盾した存在でもある。 Marc Aramini が、

[T]he deus ex machina therapist, everywhere like a God, has imperfect knowledge and purely worldly motives, achieving its therapeutic ends through destroying life rather than creating it. ("The Death of Dr. Island", para. 3)<sup>5</sup>

と述べるように、博士は全知全能の完全な存在ではない。例えば、患者全員を 救済できるわけではない。また、Nicholas を道具から治療対象に変えてしま うのも、博士には完全には未来を読む力がないことを示している。さらに、 "All this world is my eye, Nicholas, my ear and my tongue" (85) と自らを語っ ているにもかかわらず、

"To your left you will see a little path, a very faint one. Between the twisted tree and the bush with the yellow flowers."

Nicholas nodded and began to walk, looking back at Diane several times. The flowers were butterflies, who fled in a cloud of color when he approached them, and he wondered if Dr. Island had known. (105)

と、博士が"yellow butterflies"を"yellow flowers"と誤認する場面がある。 何気ない描写ではあるが、Nicholas に Dr. Island の認識の正当性を疑わせるに は十分であり、Diane についての診断を信用できなくなるのは当然だろう。

この不完全性ゆえか、Nicholas の変化に対し、当初博士は彼への態度を決めかねているように思える。Diane と自分の治療に関する "Do you want to help us?" という Nicholas の質問に、博士が "My feelings toward you are ambivalent. But when you wish to be helped, I wish to help you" (106) と治療について迷う場面に、それが表れている。そもそも博士が Nicholas を治療の道具と考えていたのは、博士の下に送られてきた様々な治療結果や IQ テストなどのデータによって判断していたからだ。そのため、新たなデータなしには Nicholas 治療の可否を判断できないこと — "It is impossible for me to plan your therapy without some estimate of your intelligence" (108) — が、この博士の迷いから推察される。しかし、先に見たように Nicholas は、Diane、Ignacio との交流の中で徐々に社会と肯定的関係を築き始める。このような Nicholas の適応能力はあらかじめデータで示されていたものではなく、この

島で Diane や Ignacio と接触する中で顕在化したものである。監視者である博士は、こうした Nicholas の変化を見ることで、野生の力と "sensitivity" が備わった彼を治療の対象にしようと最終的に態度を変えていくのである。

5

Nicholas の治療の可能性を確認するかのように、博士は"the Point"(106)と呼ばれる衛星全体が眺められる場所へNicholas を案内する。博士がNicholas をそこに連れて行ったのはなぜか。二つの理由が考えられる。一つはNicholas に彼の自己像を見せるためであり、もう一つは博士が自らの姿を見せるためである。"the Point"は、Nicolas が自己像を眺められる場所であり、Jack Lacan のいう「鏡像的自己像」を通してアイデンティティを確立できる場所といえる。Nicholas がこれまで収容所で見た自己像は"dimpled reflections"(104)でしかなく、自己像を正しく把握できていないことを考えれば、"tutelary genius"(82)を自称する博士がこの場所へNicholas を導いたのは、Nicholas のアイデンティティ確立という点で意味がある。彼にアイデンティティを認識させると同時に、博士は自らの姿を見せることによって、導き手としての自分の存在を Nicholas に示そうとしたといえる。

そこで博士は Nicholas に "You are in a beautiful spot, Nicholas; do you open your heart to beauty?" (108) と問いかける。Nicholas へのこの問いかけは何を意味するのだろうか。Dr. Island の姿を Diane は "The satellite's round of course, and all clear except where Dr. Island is, so that's a dark spot" (99) と説明するが、明るい衛星内にぽつんと存在する黒い点であり、孤独を象徴するかのように描かれている。博士が自分の姿、価値観を示し、それを Nicholas に認めさせようとする一つの理由は、博士も Nicholas や Diane 同様に孤独な存在だからではないだろうか。博士は自分の存在について他者の承認を望んでいるのだ。それは Ignacio も Diane もこの場所に連れてこられていたことからもわかる。さらに、博士の"You haven't yet said you think me beautiful"

(109)、"[M]y colors are beautiful—is that what you mean, Nicholas?" (109) という言葉からわかるように、博士は、人類にとって理想の環境、安住の場である自分の姿を「美しい」と認めて欲しかったのだ。意志に介入できるという博士の能力をもってすれば Nicholas に自分を認めさせるのは難しいことではない。だが、強制的に Nicholas を従わせたのでは、自分を認めてくれる他者としては機能しない。それゆえ、博士は Nicholas の信頼を得ようと彼を"the Point"まで導き、Nicholas の自発的な承認を求めるのである。

唯一の現実を"metal corridors, rooms without windows, noise" (95) と感じている Nicholas に、博士は"That is the unreality, Nicholas.... Even now, this — my beach, my sea, my trees — is more in harmony with most human lives" (95) と自らの価値について語りかける。これは John Milton や Alfred Tennyson の詩の引用に見られるように、博士が美を感じ取る能力と同時に、Nicholas の悲惨な境遇に共感できる能力、すなわち"sensitivity"をもっていることを示している。自らを認めさせることで、Nicholas との間に連帯感を生みだそうとしているかのようにも思える。

しかし、拙論で指摘したように、そもそも博士の役割は根本的に矛盾している。博士は理性を重視する合理主義の徹底を使命としながら、一方で、個人のもつ"sensitivity"という理性の対極にあるものを導入することで、人類の停滞を打開しようとする。だが、人間の進歩が阻害され停滞しているのは、博士が合理的に自然を操作し、人類に理想的な環境を提供したからだ。確かに、安定した社会は理想的社会、安住の場となり得るかもしれない。だがそこは、規則正しく「機能」することだけを求められる面白味のない社会であることは想像に難くない。そこに再び野生の力や"sensitivity"が導入されるとすれば、逆に秩序の破壊が予想される。実際、博士の監視下にあったとはいえ、Ignacio は殺人癖を抱えており、薬にも毒にもなるファルマコンといった存在である。失敗すれば、博士の存在意義は失われてしまう。このように見てくると、Dr. Island の行為は安定と破壊という微妙なバランスの上に存在している

ことがわかる。博士が Nicholas に語りかけるのは、そのような自分の存在、 役割を肯定的に認めて欲しいと思っているからだ。

だが、博士のこの承認願望は達成されない。復活祭の卵に関するシーンで、 博士の意識と Nicholas の意識が交錯する。そこで風景について、鳥につい て、あるいは言葉について、"beautiful"、"pretty"という言葉が繰り返され る。風景、鳥のイメージは博士の引用する Tennyson の詩 — "The mountain wooded to the peak, the lawns / And winding glades high up like ways to Heaven, / The slender coco's drooping crown of plumes, / The lightning flash of insect and of bird, / . . . / All these he saw" (108-9) — と呼応する。これが、博 士の自己イメージであり、理想とする世界なのだろう。そして、母親の"Isn't it pretty?" (110) という言葉と、博士の"Isn't it a pretty word?" (110) という 言葉が重なる。だが Nicholas は、"Words just mix you up" (110) とこれらの 言葉を受け流す。復活祭の卵を美しいものであるがゆえに Nicholas に渡すの ではなく、自分がもっておくという母親の思いやりのない言葉 — "I'm going to take it home and keep it for you. It's too nice to leave with a little boy" (110) — の前では、"Besides having great beauty of their own, they [words] are useful in reducing tension"という博士の言葉も、Nicholas には虚しく響く だけである。Gordon が "First isolated from his mother by her poor grasp of reality"(62) と指摘するように、思いやりに欠けた母親の乏しい現実感覚、 すなわち "sensitivity" の欠如が、Nicholas をさらに孤立させる。これは Ignacio の治療のためと称して Diane や Nicholas を道具として利用しようとす る、二人への配慮を欠いた博士の考えとも通底しているのではないだろうか。 こうして、母親の言葉への不信が博士の言葉への不信となり、Nicholas は"I want to be a bomb; a bomb doesn't need a safety valve" (110) といい、"Words can be a safety valve" (110) という博士の言葉を否定する。Nicholas の信頼を 得て自分の存在を承認してもらおうという、博士の願望は拒否されてしまうの である。

6

先に Dr. Island にはパターナリズム的発想があると述べたが、彼に変化をも たらす Nicholas との関係を心理学的「父と子」という視点から考えてみよ う。"the Point"へ博士が Nicholas を導いたのは彼にアイデンティティを確立 させるためであり、その点では導き手として父の役割を果たしているといえ る。だが、博士の試みは失敗してしまう。博士は"You are all of them"(112) と、そこに見える少年たちが Nicholas 自身であることを理解させようとする が、Nicholas は彼らを自分だと認めない。それどころか Nicholas は、機械仕 掛けの猿を通じて博士が語りかけていると思い、猿を殺してしまう。それに対 し博士は "You haven't killed me, Nicholas. You never will" (112) と Nicholas に自分を殺すことはできないと繰り返す。これは Sigmund Freud の 「父親殺し」を連想させる。パターナリズム的発想で自らの価値観を強要する 父に対し、息子はそれを認めない。圧倒的力の差がある父と子の間で、息子が 父の価値観を拒否し、父を乗り越えるには「父親の殺害」しかない。博士が Freud について言及する場面があり(120)、博士は「父親殺し」の意味を認識 している。それゆえ、自らの価値観を守り続けるためには、自分を殺そうと試 みる息子に殺害の不可能性を強調せずにはいられない。

自分の価値観を理解させようとする Dr. Island の Nicholas への感情は揺れ動いている。Ignacio 治療の原理である "Harlow effect" (125) という猿を使った実験についての博士の説明に、Nicholas はその効果を即座に否定し、"You said that to help me, didn't you? I don't like that" (126) と言葉を続ける。その途端、"A wave higher than the others splashed chill foam over Nicholas's legs, and for a moment he wondered if this were Dr. Island's reply" (126) と、Nicholas の言葉への博士の激しい反応が示される。Nicholas によるこの拒絶に対する報復であるかのように、Diane は Ignacio に殺害されてしまう。"He [Ignacio] killed her!" (127) と叫ぶ Nicholas に、博士は"'YES.' Dr. Island's voice was big and wild" (127) と大文字で、父としての威厳を示

すかのように大声で荒々しく答える。

YOU KILLED THE MONKEY THAT WANTED TO PLAY WITH YOU, NICHOLAS—AS I BELIEVED IGNACIO WOULD EVENTUALLY KILL YOU, WHO ARE SO EASILY HATED, SO DIFFERENT FROM WHAT IT IS THOUGHT A BOY SHOULD BE. BUT KILLING THE MONKEY HELPED YOU, REMEMBER? MADE YOU BETTER.... (127)

この大文字での発言は、お前のためにやったのだという息子を納得させようとする父親の言葉であると同時に、自分の行為を正当化しているようにも思える。"You're rocking"(127)と Nicholas が指摘するほど、博士は動揺している。一方、Nicholas は"I'm killing you"、"Destroying you"(128)と悲しみと怒りの表情を浮かべながら叫ぶ。そして、その感情の高ぶりに反応して、嵐が起き、高波が Nicholas を襲う。そのとき、博士は、

"GET BACK, NICHOLAS. FIND HIGHER GROUND. GO INTO THE JUNGLE." It was the crashing waves themselves that spoke. (128)

と、避難するよう "GET BACK" を繰り返し、必死で息子を助けようとする。「父親殺し」を否定し、父親の威厳を誇示しつつ、一方で自らを殺そうとする息子を助けようとする態度は、Dr. Island の Nicholas への複雑な感情を示している。

7

では、この最後の場面は何を表すのか。Nicholas は Dr. Island の度重なる呼びかけにも応じず、一貫して博士の価値観に抵抗し続ける。自らの命を危険に

さらしながら、博士を殺害しようとする。博士の監視下で意図的に治療された Ignacio とは異なり、Nicholas は "rationalize" されることを断固拒否する根源的力とでも呼ぶような強い力をもっている。博士に "conformity" (106) をもって接するのではなく、反抗心をもって接する Nicholas の野生の力、価値に気づいたからこそ、博士は Nicholas を救済したのだ。

だがそのような Nicholas を救済し社会復帰させることには大きな危険が伴う。なぜなら、彼の力は博士や社会が制御できないほど激しいものだからだ。その力は博士がこれまで守ってきた社会秩序を徹底して破壊するほど強い。つまり、Nicholas の救済は、最終的に博士自らの死を招いてしまうことになる。言葉の力を信じず暴力的な Nicholas は、社会にとって Ignacio 以上にファルマコンである。そのため、博士が"silent one"(130)と呼ぶ Kenneth と人格を交代させ、社会を穏やかに変革しようと考えるのである。

島田雅彦は「父親殺し」を、Freud 的定義とは別に、「ひとつの権威に対する革命、あるいは態勢の破壊」(60)と定義し、その典型例として『スター・ウォーズ』を挙げ、次のように述べる。

『スター・ウォーズ』において、息子のおかげで善の心を取り戻した父は 絶体絶命の息子を助けて皇帝を殺し、みずからも死にます。息子が父を乗 り越える、という形の典型的な関係です。(61-62)

自ら引き起こした荒海の中、Dr. Island は Nicholas によって、自らを破壊するものを助けなければならないこと、つまり、社会を進歩させるには自分の存在を消さなければならないことに気づく。Nicholas による「父親殺し」は、博士が創り出してきた安定した理想の世界の破壊であり、それは自らの死、すなわち「博士の死」をも意味する。これは、Nicholas の社会復帰が、やがては自らの死を招くことになり、Nicholas の望む「博士の死」が達成されることを意味する。つまり、「機能」する人間だけが求められる社会を否定する

Nicholas の願望が、社会を進歩させるための「博士の死」と一体化することを意味する。このように Dr. Island は Nicholas によって、自分の存在の意味を問われ、自らの死の意味を理解することになる。

### 結論

Dr. Island は宇宙という過酷な環境にいる人類に、Hopkins の詩が示すような安住の場を提供する使命をもっていた。だが、合理主義の行き過ぎは人類の停滞をもたらし、自分の役割自体が逆に人類の進歩を妨げていることに博士は気づく。Nicholas との「父と子」の葛藤が荒波となって、博士の心を揺さぶったのだ。"The Death of Dr. Island"というタイトルは、Diane の死と同時に、「博士自らの死」を意味し、皮肉にも"a death that would help someone else"(129)は、「自らの死による人類の進歩」を意味することに博士は気づく。こうして、博士は自らの死を悟り、人類進歩のためにNicholas を静かなKennethと交代させた今、自分の詠む句に答えるものもいない孤独な存在となる。芭蕉の句は、このような博士の葛藤や孤独、悲しみを反映しているといえるだろう。

## 注

- 1 以下、拙論については「Gene Wolfe "The Death of Dr. Island" 試論-Nicholas の消滅が意味するもの」『大阪学院大学外国語論集 第68号』 2014年を参照。
- 2 参考にした訳をいくつか挙げておく。
  - "the rough sea— / flowing toward Sado Isle / the River of Heaven" (260) Bashō and His Interpreters. Trans. by Makoto Ueda. Stanford: Stanford UP, 1991.
  - "A rough rolling sea / Above Sado Island / Lies the River of Heaven." (135) 1020 Haiku in Translation. Trans. by Takafumi Saito, William R.

Nelson. North Charleston: BookSurge, LLC. 2006.

- "The great Milky Way / Spans in a single arch / The billow-crested sea, Falling on Sado beyond." (131) The Narrow Road to the Deep North and Other Travel Sketches. Trans. by Nobuyuki Yuasa. Harmondsworth: Penguin Books, 1966.
- ・"Turbulent the sea / Across to Sado stretches / The Milky Way." (109) 『英文収録 おくのほそ道』ドナルド・キーン訳、講談社学術文庫、2007. Beilenson 訳は http://www.sacred-texts.com/shi/jh/jh03.htm を参照。
- 3 根源的イノセンスについて、芹沢俊介は次のように述べている。

生まれてくる子どもは、自分が生まれるべきか否かを考えたり選んだりすることができない。また生まれてくる子どもは、自分を生む親を誰にすべきか選ぶことができない。(中略)生まれてくる子どもはこうした何重もの不自由を背負っている。これらの不自由は暴力と言いかえてもいい。いずれにしろ子どもは根源的に幾重にもわたって受身であることは確かである。この根源的な受動性をイノセンスと呼ぶことにする。子どもは根源的にイノセンスである。(『現代<子ども>暴力論 増補版』春秋社1997、21)

- 4 Oxford Learner's Dictionaries Web 版を参照。作品中の"sensitivity"の 訳としては、「感性」、「感受性」が考えられるが、ここでは「思いやり」 という日本語訳が適切ではないかと思われる。
- 5 Marc Aramini からの引用は電子書籍のため、引用箇所の見出しとその見出し内のパラグラフ番号を記す。

# 引用文献

Aramini, Marc. Between Light and Shadow: An Exploration of the Fiction of Gene Wolfe, 1951 to 1986. Kindle Ed. Kouvola: Castalia House, 2015. Gordon, Joan. Gene Wolfe. Rockville: Wildside Press, 2006.

- Hopkins, Gerard M. *The Poems of Gerard Manley Hopkins*. 4th Ed. Oxford: Oxford University Press, 1970.
- Ueda, Makoto. *Bashō and His Interpreters: Selected Hokku with Commentary.* Stanford: Stanford UP, 1991.
- Wolfe, Gene. "The Death of Dr. Island." *The Island of Doctor Death and Other Stories: And Other Stories*. New York: A Tom Doherty Associates Book, 1997.
- —. The Best of Gene Wolfe: A Definitive Retrospective of His Finest Short Fiction. New York: A Tom Doherty Associates Book, 2009.
- 島田雅彦『100分 de 名著 ソポクレス オイディプス王』NHK 出版 2015年 広末保他『日本文学の古典』岩波新書 1995年

# Reconsideration of Gene Wolfe's "The Death of Dr. Island": The Meaning behind the Title

# Osamu Yamaguchi

This paper aims to clarify what the title "The Death of Dr. Island" means. Gene Wolfe says, "'Death,' as I saw it, could be handled in two ways: Dr. Island could die, or Dr. Island could decree a death." As he says, this title admits two readings. It is certain that "Dr. Island could decree a death" refers to the death of Diane, but what does "Dr. Island could die" mean?

Wolfe quotes Gerard M. Hopkins' poem at the start of the novel, and Basho's *haiku* at the end. These two quotes establish a context which helps us to interpret the novel. The opening poem shows Dr. Island's desire to reactivate his society and to change the world into a refuge for people who live apart from the Earth. On the other hand, the *haiku* implies his realization that, as Dr. says, his own death is "a death that would help someone else," thus adumbrating this loneliness and sadness of his.

Dr. Island decides to cure Nicholas to revitalize the society, but Nicholas refuses to take part in Dr. Island's "language game." He rebels against Dr. Island from the start. As Freud's idea of "patricide" indicates, Nicholas, who seems to be a son, tries to kill Dr. Island, a father. When Nicholas tries to destroy the island, Dr. Island changes Nicholas' personality into his alter ego, Kenneth, and makes Kenneth take over the task, because he thinks that Nicholas is too wild to galvanize the society.

In spite of his attempt to revitalize the world through Kenneth, his

experience with Nicholas exposes Dr. Island's contradiction: the overly rationalized society which he serves is the cause of stagnation. As a result, he understands that he has to die to revitalize the society.

# パメラ・ジェーンズ著 『シェパーズ・ブッシュ――ディケンズ とのつながり』抄訳(後半)

# 永 岡 規伊子

## 抄訳(後半)

# ユレーニア・コテッジの居住者たち

1851年3月30日の国勢調査によると、二人の婦人がユレーニア・コテッジの責任者となっている。二人とも未亡人で、33歳のジョージアナ・モーソン(監督)と35歳のジェーン・マッカートニー(家政婦)である。16歳から21歳までの11人の若い女性が名簿に記載され、全員が「無職」となっている。その中には二人の姉妹がいた。エレン・グリンは17歳で、ディケンズによると、彼女は刑務所に入ったことはなく、クラーケンウェル救貧院から送られてきた。その姉妹のシャーロットは21歳とあるが、後の手紙で、彼女が「自分で13歳だと申し立てる」ようになったと書かれている。「国勢調査ではライム・グローブ通りに添った隣の土地に75歳のエリザベス・スコット夫人という名が登録されているので、彼女がユレーニア・コテッジの所有者だったと考えられる。

1861年の国勢調査には、まだマッカートニー夫人の名前がある。<sup>2</sup> 彼女は「ホーム」の副監督で、47歳となっているが、国勢調査員が彼女の年齢を 2歳間違えたようだ。(あるいは、本人が1851年の国勢調査で実際より若く申告したのだろうか。) その時はマーチモント夫人が責任者で(モーソン夫人は結婚して辞めていた)、家政婦のクララ・バニスターが 3 人目のスタッフとして名前があがっている。また名簿では10名の収容者がおり、全員が「女中」で、名前の上方に別の人の文字で「更生のため」と書かれている。

1861年の国勢調査に記載されている少女について、ディケンズはコメントを

する必要がなかったが、それ以外の収容者に関してミス・クーツに詳しい手紙 を書かざるを得なかったようだ。

マーサ・ゴールドスミスは21歳で、その前の1年間はマグダレンという更生施設に入っていた。彼女は優れた人物証明書と着替えの服と3シリングを持って、行くところもなく退所した。3ディケンズはマグダレンのやり方が効果的かどうか疑いを持ったに違いない。マーサは「そこに入っていたために明らかに状態が悪くなっていた」からである。

ジュリア・モーレイは夕食の後、密かに抜け出して、壁越しに知り合いの男 に伝言を渡すのを常習としていた。

イザベラ・ゴードンは、先にも述べたように、ハナ・マイヤーズと共謀して 収容者全員がホームのスタッフに敵対するように仕向けた。彼女の行為はホームを混乱に陥れるものだったため、半クラウンのお金を与えられ、助けを求め ることができる慈善施設への行き方を教えられて追放となった。

追放されるということは収容者にとって最悪の事態だったので、イザベラ・ ゴードンが出ていく時は、彼女たちだけでなくスタッフも泣いた。しかし他の 収容者のために、情けをかけることはできなかった。

イザベラの友達のハナ・マイヤーズは、重罪を犯してミドルセックスの治安 判事裁判所に出廷した。彼女は植民地への流刑を懇願したが、トレイシー刑務 所での懲役12か月の刑が言い渡された。彼女は1854年1月18日付のミス・クー ツ宛ての手紙に再び登場し、「先週、トレイシー刑務所でハナ・マイヤーズが (彼女は再びそこに入っているのですが)、最近ホームで盗みを働いた若い女の 隣に腰掛けているのを見かけました」と書かれている。

トレイシー刑務所からユレーニア・コテッジに何人かの若い女が送られている。セシーナ・ボラードはその一人であった。ディケンズによると、彼女は「この町で一番の嘘つきのあばずれで、悪に染まった界隈でもあれほど汚れた女はいない」という。セシーナはイザベル・ゴードン事件で、ホームの収容者をスタッフに敵対させようとした時に関わった三人目の人物だった。ディケン

ズはセシーナがホームに留まることはないだろうと確信していた。

イザベラが悲しげにホームを出た次の日の朝8時30分に、モーソン夫人はセシーナについて報告をするためにデヴォンシャー・テラスのディケンズの家に急いだ。その前夜、セシーナがふてぶてしい態度を取ったので、夫人は部屋にいるよう彼女に命令し、自分たちの身を守ってもらうために庭師に一晩中家に居てもらったのであった。それを聞いてディケンズは、セシーナ・ボラードが「ちっぽけでずんぐりしていて、背がマッカートニー夫人の腰ほどにしか届かない」女性なのに、と面白がった。彼はモーソン夫人にホームへ戻って、セシーナに身支度をしてすぐに出て行きなさいと指図するように言った。もし自分が到着する前にセシーナが出て行っていなければ、ディケンズは警察を呼んでいただろう。

モーソン夫人がホームに戻ってその伝言をセシーナに告げると、彼女は、「病気の振りをしてみた後、ナイトキャップを部屋の端に、ナイトガウンを反対の端に投げつけ、落ち着き払って身支度をし始めた」が、雨の中を出ていけないと言って抗議した。ホームを出ていく前に、セシーナは「ミス・クーツの住所を知っているから、ここでどんな扱いを受けたかを長々と手紙に書いてやるわ」とモーソン夫人に言った。ディケンズは通りでセシーナに出会って別れを告げたが、その日遅く「ノッティング・ヒルをはつらつとして歩き、時々ショーウィンドウを覗き込んでうきうきしている」彼女とすれ違った。彼は、セシーナがイザベラ・ゴードンと落ち合うつもりだろうと思った。

ディケンズはセシーナについて、「2週間で女子修道院を堕落させてしまう だろう」と言っている。

ジェミマ・ヒスコックは、1850年に、「小さなビール貯蔵庫の扉をナイフでこじ開けて、メアリー・ジョインズという別の収容者と一緒に「泥酔」した(メアリーはジェミマほどひどくではないが)。ジェミマは「聞くに堪えない言葉」を使ったので、弱いビールを飲んだ上に「壁から投げ入れられた強い酒」を飲んだのだろうと考えられた。

ディケンズは、「侵入者を近づかせないために、庭に大きな犬を」飼うように提案した。その頃、「近隣に牛乳配達をする既婚の礼儀正しい男性」が家に 隣接する野原を牧場として借りていた。

では、コールドバス・フィールズ刑務所で、ユレーニア・コテッジの開設を 待っていた二人の少女はどうなったのだろうか。

一人は待っていなかった。ディケンズは最初からこの少女について疑いの目を向けていた。刑務所のスタッフによると、彼女は「模範囚」で、他の囚人たちよりは教育を受けていた。だが自己弁護の言葉が多く、一緒にいると落ち着かない様子から、ディケンズは彼女が信用できない人物だと確信した。その後、彼が刑務所長に、「もし私たちがしくじることがあるとしたら、きっと彼女だろう」と話したところ、刑務所のスタッフがとても動揺したので、余計なことを言わなければよかったと思った。しかしほどなく「模範囚」は姿を消した一おそらく昔の生活に戻るために。彼女の友達はとても悲しみ、「彼女が行ってしまってからずっと、一日中泣いている」とディケンズは書いている。しかし、その少女はコールドバス・フィールズ刑務所でさらに3週間留まった後、ユレーニア・コテッジに最初に入所した4人のうちの一人となった。彼女には刑務所を出る時に着るようにと、衣服が届けられた。すべては過去を断ち切るためであった。

収容者の一人であるルイザ・クーパーによると、フランシス・クランストンは「『物静かな人たち』を仲間はずれにした」という。フランシスは、真面目にやろうと努力している誰に対しても、他の人たちが反感を抱くように仕向けたのである。その当時(1854年)のスタッフであったマッカートニー夫人とマーチモント夫人は、フランシスが「他人をトラブルに巻き込んでおいて自分は無関係―ほんの少しだけ外側にいる―という立場にしておくことにかけてはとてもずる賢かったので、彼女を捕まえることはできない」と感じていた。

ディケンズは、フランシス・クランストンが10日以内に態度を改めなければ、彼女を退所させるように委員会に提案すると言った。これを聞いて、別の

収容者であるエリザ・ウィルキンズは、もしフランシスが出ていくのなら自分 も出ていきたいと訴えた一彼女たちは「いつも一緒だった」からである。エリ ザは「こんなに長くここに居るのは飽きた」と言ったため、ディケンズは、エ リザの父親(以前の手紙で、彼女の「不幸な父親」と言及されていた)に手紙 を書いて、彼女が次の月曜日にホームを出て行くことになったと知らせるよ う、家政婦長に言った。

ディケンズがホームを後にしてから、「クランストンがルイザ・クーパーに対して突然激しく怒り出したため、クーパーは、(殺されるのではないかと恐れて)安全のために自分を閉じ込めてほしいと懇願したので、そのようにした」。フランシス・クランストンはすぐにホームを出たいと言ったが、家政婦長のマーチモント夫人には彼女を行かせるべきかどうかわからなかった。そうしているうちに、フランシスは全員に向かって「いちかばちか出ていってやる」と言ったため、マーチモント夫人は彼女も別の部屋に閉じ込めたのであった。

次の日、マーチモント夫人は助言を求めてディケンズを訪ねた。彼は夫人に、フランシス・クランストンをすぐに追い出すように、そしてエリザ・ウィルキンズの父親に娘を連れに来てほしいと伝えるように言った。(1854年6月18日付の必要諸経費として、エリザ・ウィルキンズの父親に支払った3ポンドの勘定書がある。)

ディケンズは「断固とした態度が本当の親切」であると述べ、フランシスを もっと早く追い出す話し合いがあったようだが、もしそうしていたら「ウィル キンズを救うことができただろう」と言っている。

フランシス・クランストンは、後にホワイトチャペルに住む独身の男の三人 の子供を世話していたと伝えられている。彼女は家事をうまくこなしていた が、残念なことに「洗濯がひどく下手だった」という。

幸いにも、失敗よりも成功したケースの方が多かった。フランシスのことで 困難なことがあったにもかかわらず、ルイザ・クーパーは訓練をやり遂げた。 彼女は1854年10月20日に移住する前に、ミス・クーツに手紙を書いたが、それ は以下の通りである。

イギリスから旅立つにあたって、私の恩人である貴女のご親切に心から お礼を申し上げます。感謝の気持ちを表す言葉が見つかりませんが、お祈 りをすればいつも共にいて、決してお見捨てにならない神様の助けを得 て、これからの生活の中でその気持ちをお示ししたいと思います。貴女の 親切で優しい言葉をよく思い出します。それは、私にとって慰めでありま したし、遠い国でも慰めとなることでしょう。11月10日まで出航の予定は ありません。ボイル夫人(この夫人は、ユレーニア・コテッジを出た女性 にケープでの仕事を世話し、一緒に渡航した人物であろう) は、出航の一 週間前にプリマスへ行きます。敬愛するレディに祝福がありますように。 そしてホームの若い人々が貴女の恩恵に値する者であることを証明できま すように。彼女たちを心配してくれる人がおられるということは励みにな ります。最初は貴女が来られるのをどんなに恐れたか、そしてどんなにす ぐに貴女を愛し尊敬するようになったかを忘れることはありません。貴女 は大変親切に手紙をくださり、良きアドバイスを与えて下さいました。ユ レーニア・コテッジのことやそこで過ごした多くの幸せな時間をよく思い 出します。私は、貴女のお許しを得て、テナント氏のご親切に対するお礼 の手紙を書かせていただきました。ケープに到着しましたら、お便りさせ ていただきます。貴女に祝福がありますように。貴女様のことをいつも 祈っております。

# 敬具

ルイザ・クーパーは1856年にホームに帰ってきた。ディケンズは、「ルイザ・クーパーが立派な服装をして、健康そうな様子で、マッカートニー夫人と一緒にホームの細長い部屋で座っているのを見るのは大きな喜びでした」と書

いている。「彼女は、わたしへのプレゼントとして、ぞっとするようなダチョ ウの卵をくれました。表面全体に趣味の悪い絵が描かれ、その中でましなのは (王冠をつけた) ヴィクトリア女王が、教会の頂上に立って、英国水夫の歓呼 に応えている絵でした」。

### ホームへの入所

設立時から、ホームはこれまでにない施設を目指していた。それは若い女性を「品行方正」な道に「導くための」ホームであった。「彼女たちを引きずり回したり、追い立てたり、脅かしたりしてはなりません」。ディケンズは、社会に対する義務を売春婦に説いても何にもならない、と考えていた。「世間が彼女たちを冷たくあしらい、追い払ったのだから、彼女たちが社会の善悪を気にも留めなくなったのは当然の結果で」、プライドと自尊感情は親切にされることで取り戻されるはずだと言っている。

ホームは家族-「無邪気に陽気な家族」-のように小さなグループで運営されることになっていた。若い女性はそこで家事を学び、自尊心を取り戻すことができれば、社会に自分の居場所を見出すだろう。ディケンズは、「厳格でありながらも、楽しく希望に満ちた訓練の体制が確立されること」が最も重要であると感じていた。それは「秩序、時間厳守、清潔、家事の日常業務」であり、「仕事と禁欲の単調な生活はここでおわりにして、神に祝福された自分の幸せな家庭を持つことを目標としている」ことを、皆が理解しなければならないと強調した。彼はまた、このような人々のために適切な施設付き牧師を選ぶことが重要だと考えていた。「誤った対応をすると、彼女たちはきっと期待を裏切る」ことになるからである。

最初の収容者のうちの一人は自分のベッド―自分だけのベッド!―を見て喜びの声を上げた。相部屋ではあったが、皆それぞれに自分のベッドを持つことができた。

収容者を探すことがディケンズに課せられたもう一つの仕事だった。彼は刑

務所長と長時間話し合い、ユレーニア・コテッジの最初の収容者は全員刑務所から受け入れた。時がたつにつれて、ユレーニア・コテッジはかなり広い範囲から女性を受け入れるようになった。飢えたお針子、貧民学校の貧しい少女、警察署で一時保護された衣食にも事を欠く少女、通りに立つ若い女などである。ホームの存在を知ってもらうために、彼は刑務所にいる女性に向けて訴える文を書き、配布している。

## 「堕ちた女に訴える」

この手紙を読み始めて、貴女個人に呼びかけているのではないと思われるでしょう。けれども、幸せになるために生まれてきたのにみじめな暮らしをしてきた人、前途に悲しみしか、あるいは過去に無駄にすごしてきた青春しか見出せない人、かつて母親であったのなら、自分の不幸な子どもに対して誇りではなく恥を感じている人、私はそのような、まだ若い女性たちに呼びかけているのです。

貴女たちはそのような女性たちです。そうでなければ、この手紙が貴女の手に届くことはなかったでしょう。もしあなたが悲惨な生活から抜け出し、友達と静かな家と、自分と他人に役立つ手段と、心の平安と、自尊心と、貴女が失ったすべてを取り戻す機会を求めることがあったなら(そう願ったことがあるにちがいありません)、この手紙をよく読んで、後でよくお考えください。

私は、そのようなすべての善きものを与えてあげられるかもしれないというのではなく、確実に与えてあげられるのです。もし、それを受けるに値するように、貴女が努力するのであれば。私があなたよりずっと優れていると思ってこのように書いているのでもなければ、あなたの置かれた立場を思い出させて傷つけようと思って書いているのではありません。ただ貴女に親切にしたいだけですし、貴女が私の妹のように思って書いているのです。「後略14

この訴えは、将来ユレーニア・コテッジに入る可能性のある女性に向けて、 刑務所にいるうちに読むようにと配布された。初期の収容者のうちの何人か は、クラーケンウェルにあるコールドバス・フィールズ刑務所から来た。この 刑務所はとりわけ苛酷な状況であったことから、バスチーユ監獄(英語読み: バスティール)に因んで「スティール」と呼ばれていた。その刑務所は、現在 ではファリンドン・ストリートとローズベリー・アヴェニューの交差点にある マウント・プレザント郵便物仕分け所になっている。

コールドバス・フィールズはもともと男女両方が入る刑務所だったが、1850年までに、女性と少年をウェストミンスターにあるトットヒル・フィールズ刑務所に移すことに決まった。そのためコールドバス・フィールズは、有罪判決を受けた成人男性だけを受け入れるようになった。ウェストミンスターの刑務所は女性を600人収容することができ、そのほぼ半分は寄宿舎の造りになっていた。

G.L. チェスタトンはコールドバス・フィールズの刑務所長で、オーガスタス・トレイシー中尉はウェストミンスターにあるトットヒル・フィールズの刑務所長だった。二人は友人で犯罪者の更生に興味を持っていただけでなく、先に述べたように、ユレーニア・コテッジの委員会のメンバーだった。ディケンズがユレーニア・コテッジを見つけた時、チェスタトンは彼と一緒にいて、賃貸の取り決めをするのを手伝った。トレイシーは自分の刑務所から多くの収容者を送っており、両者は最初からその事業に関わっていた。

# ユレーニア・コテッジでの生活

少女たちの服装は救貧院のようなお仕着せではなかった。ディケンズはミス・クーツに、デリー(木綿の布)のサンプルの色が「陰気すぎる」として送り返したこともあった。彼はドレスやリネンをトッテナム・コート・ロードにあったシュールブレッドという店で買っていたが、「適度に明るい感じで、それでいてこざっぱりして控えめな」ドレスを注文している。「ホームで3人が

似たような服装をするとして、同時に4色のドレスがあればいいでしょう。3 人一緒か、あるいは家政婦長のホールズワース夫人と一緒に出かける時に、自 分たちが目立っていると感じないで済みますから」。

少女たちは、学課に加えて家事のやり方も教わったが、洗濯の日は困ったことが起きた。1848年のことだが、洗濯の日はホールズワース夫人とグレーブズ夫人が交互に早起きするようにと委員会が伝えたところ、ホールズワース夫人はディケンズに「グレーブズ夫人は無理です」と答えたのである。ディケンズはうんざりして、そのことは自分でミス・クーツに伝えるようにと言った。グレーブズ夫人は「礼儀正しいが早起きが苦手」なので、あまり頼りにはならなかった。1850年には、ディケンズは「通いで手伝ってくれる女性を雇ってはどうか、そうすれば少女たちも教えてもらえる」と提案している。またパン作りにも問題があった。彼は「オーブンがあるのだから、パンを買わせるわけにはいかない」と言って、ここでも誰かに教えに来てもらってはどうかと助言している。

ホームでは娯楽の時間もあって、「一緒に座って針仕事をしたり、友達への プレゼントを作ったり、夏には小さな花壇の手入れをしたりした」。昼食後の 娯楽の時間に続いて、「慎重に選ばれてはいるが、興味の持てる本」の読書の 時間があった。それはすべて、彼女たちに新しい生活、植民地での新たな出発 を準備するためであった。そこで、彼女たちは「善良で誠実な男性の妻」とな ることが期待されていた。ミス・クーツは、彼女たちが救われるのであれば、 結婚してもしなくても構わないと思っていた。

ディケンズは説教から選んだ「とてもシンプルで、それ自体で美しい」二つの「聖句」を居間に飾った。また彼自身が書いた二つの文を貼り出さずにはいられなかったようだ。一つは、「秩序正しさ、時間厳守、温和であることの大切さ」についてであり、もう一つが「神に対する私たちの義務と、隣人に対する私たちの義務」についてであった。さらに、寝室にも同様のものが掲げてあり、「互いを思いやり赦し合うことなしに床に就かないように促す」内容で

あった。そして、少女が「到着した時に」家政婦長のホールズワース夫人が一 人一人に読んで聞かせるための「短いあいさつの言葉」を書いた。

音楽も教科に入っており、そのレッスンはディケンズの友人で、姉のファニーと王立音楽院で同窓だった作曲家のジョン・フラーが担当した。1848年のフラーの請求書が25ポンドという報告書が残っている。ディケンズは中古のピアノを探しまわり、ついに9ポンドで見つけた。「家族移民のためのローン協会」を設立し、3,000人ほどの貧しい人たちをオーストラリアに移住させたキャロライン・チザムが、少女たちは「ピアノを複数持っている」というのは本当かと、ディケンズに尋ねたという。彼はミス・クーツに宛てて「ええ、それぞれ一台ずつ持っています。グランドピアノが1階にあって、寝室には小型のアップライトのピアノがあって、それに洗濯場に小さなギターがあります、と言えなかったことが、今後ずっと残念に思うことでしょう」と書いている。

## 極瞬

良い行いを奨励するために「評価表」が考案され、点数が良いと報酬として お金が与えられた。評価は1から4で、4が最高点だった。評価表は、マコナ キー大佐の評価システムをディケンズが修正したものだった。

アレクサンダー・マコナキー大佐は、刑務所の改革と規律について多くの著作がある。政府に任命されて、受刑者のウェイマス港での建設作業態度を評価する採点システムを考案した人物である。ユレーニア・コテッジの収容者たちは次のような項目に分けて評価された。

誠実さ

勤勉さ

平静さ

行動や会話の礼儀正しさ

自制心 (穏健さと忍耐力を指す)

整理整頓 時間厳守 倹約

清潔さ

「これらの項目それぞれについて、全員が毎日計算して記録した」。得点の平均は週に170点だった。「この平均的な年間収入は、庶民階級の女性使用人が得る1年の賃金とほぼ同じ額だった」。「彼女たちの各々の収入は海外移住するまで取っておかれた。外国に到着して生活を始める資金にするためである」。

病気の場合は、その人が普段平均して得ている点数が与えられた。日々の努力を台無しにし兼ねないので、ディケンズは悪い点数をつけることに慎重だった。しかし「誠実、不誠実」に関わるケースは、朱書きされることになっていた。

少女たちは自分の得点を大切に思っていた。最後には追放されることになる一人の少女が、「素行が良くなければ1か月間点数がもらえない」と言われ、この扱いを不服としてディケンズに会いたいと願い出たことがあった。「彼女が言葉巧みに話をつけようと部屋に入って来たところをお見せしたかったです。彼女は点数がもらえないと、『自分の思うとおりに仕事ができない』と言うのです。『あなたが私たちの思うとおりにすれば、それで十分なのですが』。『ええ!でも』と彼女は言います。『私の点数を取り上げないでほしいわ』。『そうですね。それは当然ですね。取り戻す唯一の方法は、あなたができるだけ良い行いをすることです』と私が言いますと、彼女は『あら!すぐに点数をもらえないなら、出て行きたい』と言うのです」。そこでディケンズは、「いいでしょう、明日の朝出て行きなさい」と告げた。

ディケンズはユレーニア・コテッジをよく訪れ、若い女性たちと何度も面会 した。彼女たちの様子がどのように変わっていくかを観察したが、「摂食状況 については変化がなかった。そもそも彼女たちに食欲がなかったからだ」。あ る警察裁判所判事が移住する直前の若い女に会いにきた時、彼女が一年前に知っていた女だと気がつかなかったとディケンズは1853年に書いている。ホームでは、女性たちへの面会は許されていた。親は月に1回、それ以外の人は3か月に1回である。その面会には、監督が常に同席することになっていた。収容者は「親戚や昔の先生や親切にしてくれた人たちに手紙を書くこと」ができたが、手紙は主任監督が目を通して投函した。

ホーム開設の数年後、ディケンズはミス・クーツを説得し、『家庭の言葉 (Household Words)』という週刊誌にホームについての記事を書く許可を得て、1853年4月23日土曜版(161号、2シリング)に載せた。彼はそこにホームの成功について書き留めている。アンジェラ・バーデット・クーツには問題点を報告するが、雑誌には成功例だけを書いたのは自然なことだろう。記事には個人の名前も、ホームの場所も、篤志家の名前も出さず、タイトルも「堕ちた女の家(Home for Fallen Women)」ではなく、「家なき女性のための家 (Home for Homeless Women)」として紹介している。

そこには収容者たちの一日が描かれている。彼女たちは朝6時に起き、授業に加えて、朝の祈りと聖書の時間があった。(土曜日には授業はなく、大掃除と床磨きとお風呂の日だった。)日曜日はもちろん教会に行った。

『家庭の言葉』では、収容者のプライバシーを守るために事例番号で言及されている。ディケンズは1851年12月22日の手紙に、「この数時間を費やして事例集を作っているが、それを年末までに終えたい」と書いている。従って、それぞれの収容者についての詳しいメモが取られていたようだ。おそらくこれらのメモが、雑誌に公表される事例を書くのに役立ち、事例番号と順番がメモの通りに印刷されたのだろう。

# 『家庭の言葉』からの抜粋(8人のケース)【省略】5

ホームでの入所期間は必要に応じて、とされていたが、通常は約1年だっ

た。1853年の『家庭の言葉』で、ディケンズは56人の少女が施設の収容期間を終え、30人が成功し(「2対1は励みとなる比率である」)、そのうちの7人は結婚した、と報告している。10人は素行が悪くて追い出され、3人は植民地へ向かう途中で堕落し、残りは本人の事情で去っている。概して彼女たちは品性も行いも良くなり、結婚すべく(ディケンズがそう望んでいた)オーストラリアなどへ移住した。外国に渡った女性が再び堕落したかどうかについては報告されていない。

# 移住

若い女性たちがユレーニア・コテッジを去った後も、ミス・クーツは彼女たちを長らく見守り続けた。彼女は、1850年に、アデレイドとケープ・タウンに司教を送るための資金を提供している。ケープの総督夫妻はミス・クーツの友人で、最初に移住した何人かの女性の世話をした人物である。

少女たちが外国へ渡る時がきたら、一人ではなく、2人か3人で旅をするべきだとディケンズは思っていた。「外国で互いに助け合うことができるように、彼女たちが深い友情で結ばれていたら素晴らしいことだ」。流刑と移住を誤解されることがよくあったが、ユレーニア・コテッジの女性たちの場合は移住だった。

女性たちは三等船室で旅をした。当時は、一番良い時期であっても、船旅は 不快なものだったので、もし三等船室を耐えることができたら、将来の生活を 切り拓く良い準備となるだろうとディケンズは思っていた。

ディケンズは、移住の後に結婚した女性の一人が書いた手紙で、『家庭の言葉』の記事を結んでいる。

彼女は、「拝啓、私がどのように暮らしているかをお知らせするために再びお便りいたします」という言葉で書き始めている。一緒に移住した別の女性が結婚して36マイル離れたところで暮らしていることについて、また自分の夫のことや野菜を栽培している庭について記している。そして、「3匹のかわいい

豚を飼っていて、先週1匹を殺しました...」。「かわいい猫を飼っていて、これを書いている間、私の方を見ています...」。「飼っていた2羽の小鳥がいなくなりました。 I 羽は死んで、もう1羽は飛んで行ってしまったので、今はいません。がっかりですが、猫がいるので十分です」。手紙は、彼女に示してくれた親切への感謝と「幸せな場所」であったホームを再び訪れたいという希望で締めくくっている。

#### 後記

コレーニア・コテッジが1862年に閉じられるまでに、150名に及ぶ女性たちがその施設での「試み」に参加した。閉鎖された時は、ミス・クーツの出納係であったジョン・サプスフォード一家がしばらく住んでいた。その後、別の家族が何組か入れ替わって住み、1872年には「リンデン・ハウス」という名前に変えられた。そして1912年にゴーモンが映画撮影所として買い取って、「マネージャーズ・ハウス」として知られるようになった。このようにして、施設は存在を終えたのである。

チャールズ・ディケンズはこの事業を「試み」と呼んだが、それは、設立に あたっての彼の趣意表明であると同時に、当初感じていた懸念を反映したもの であろう。

この試みが成功したかどうかをどのように見極めるべきだろうか。

150名の若い女性たちが人生の新しいスタートをする機会を与えられた。しかし、その多くはすぐに昔の生活に戻ったことがわかっている。もし、かなりの比率で彼女たちが、ミス・クーツが言ったように「救われて」いれば、確かに成功だったと言えるだろう。しかし、その試みは続かなかった。もちろん、試みが成功すればすべて継続するものだというわけではないが、この場合まだ存続の必要性があり、必要とする人々はいたにも関わらず、続けられることはなかったのである。

それは単発的な慈善の行為であり、歴史の中で小さいとはいえ画期的な出来

事であるが、それが取り組もうとしていた悪の解決策とはならなかった。

もし彼女たちにその気があれば、150人の少女たちが新たな生活を送るチャンスを与えられはした。しかし、ロンドンの通り、ヘイマーケットとピカデリー、そしてミス・クーツの家の階段には、毎夜客引きをする150人以上の女たちがいたことだろう。

#### 訳注

この抄訳のテクストは、Pamela Janes, *Shepherd's Bush.... The Dickens Connection (The Story of Urania Cottage: Home for Fallen Women in Lime Grove, Shepherd's Bush*), Shepherd's Bush Local History Society, 1992. である。

抄訳前半の解説で述べたように、この冊子には、バーデット-クーツの肖像画、1915年に写された元「ホーム」の建物の写真、当時の地図、ディケンズの小説『ディヴィッド・コッパーフィールド』に使われた挿絵、ディケンズ自らが編集した雑誌に匿名で載せた「家なき女の家(Home for Homeless Women)」の記事の1ページ目のコピーが掲載されている。

ここでは、紙面に制約があるため、他の研究書で頻繁に掲載されている内容の部分と、ディケンズの書いた女性受刑者へのアピールの大部分、またディケンズの雑誌記事から著者が抜粋した部分は省いて抄訳としたことをお断りしておきたい。

また、本書に記載されたユレーニア・コテッジの教区税の記録を抄訳前半の 末尾に、1861年のセンサスに載った「ホーム」の収容者名の表を本抄訳後半の 末尾に付した。

1 さらに、ディケンズは1851年12月22日のクーツ宛ての手紙で、シャーロット・グリンが13歳と偽っているが、ニューゲート・ストリートの貧民学校の先生の家で彼女を初めて見た時15歳と言っていたのでそれが正しい年齢に違いない、と書いている。(Edgar Johnson ed. *Letters From Charles* 

Dickens to Angela Burdett-Coutts, 1841–1865., London: Jonathan Cape, 1953. 191.)

- 2 末尾の「1861年国勢調査」参照
- 3 マグダレン救護院 (Magdalen Hospital) は、1758年の創設当初「最高の介護と思いやり、親切」が示される、「矯正施設ではなく楽しく過ごせる保護施設」を目指していた。 (David Owen, English Philanthropy, 1660-1960, Harvard UP, 1964, 58) この引用の直前で、ディケンズは、マグダレンでは1年しか収容してもらえないため、マーサ・ゴールドスミスは新しい入所者を迎えるために出所させられた、と書いている。 (Johnson, Letters 115, 1848年1月16日付ウィリアム・ブラウン博士宛の手紙)
- 4 省略した部分の最後は、「あなたの真の友達」からの訴えであることを「信じてください」という言葉で結ばれている。これは、1847年10月28日のミス・クーツ宛の手紙に同封されていたもので(Johnson, *Letters* 98-100)、彼女の承認を経て、刑務所に服役中の女性に配布された。
- 5 この記事は、ディケンズが編集する週刊誌『家庭の言葉(Household Words)』161号(1853年4月23日)に掲載された。Michael Slater ed. Dickens' Journalism, Vol.3, 1851-59. に収録されているが、現在以下のURLで公開されている。

http://www.djo.org.uk/household-words/volume-vii/page-vii.html (Dickens Journals on Line)

抄訳で省略した部分では、ディケンズが匿名で書いた8名の少女(27番、13番、41番、50番、58番、51番、54番、14番)の記事が掲載されている。

ルーシー・マーチモント 主任 未亡人 48歳 「ホーム」の監督

#### \*1861年国勢調査によるユレーニア・コテッジの住人

ジェーン・マッカートニー 助手 未亡人 47歳 「ホーム」の副監督 ミドルセックス、ハックニー クララ J バニスター 助手 未婚 27歳 家政婦 スタンフォード、ウルバーハンプトン 更生 アニーLロウ 収容者 未婚 19歳 女中 コーンウォール、ファルマウス アン・モリス 収容者 未婚 19歳 女中 オクソン、ハイムア・クロス ケイト・ラッセル 収容者 未婚 18歳 女中 ケント、グリニッジ ファニー・ベイカー 収容者 未婚 14歳 女中 ミドルセックス、ケンティッシュ・タウン

エリザ・アクハースト 収容者 未婚 19歳 女中 フラ

フランス N.B.K\*

ハンツ・チャールトン

エレノア・クィーン 収容者 未婚 16歳 女中

ミドルセックス、ロンドン

アニー・ウィルデック 収容者 未婚 16歳 女中

ケント、グリニッジ

エリザベス・エベット 収容者 未婚 22歳 女中

サセックス、ケニントン

サラ・クック 収容者 未婚 23歳 女中

サセックス、ワージング

ヘフ・ジェンキンス 収容者 未婚 19歳 女中

ケント・ダートフォード

\*これは、出生地不明 (No Birth place Known) を示す。 すべての収容者は女中 (domestic servants) と書かれている。 下段は出生地 The second half of a Japanese translation of the booklet: *Shepherd's Bush... The Dickens Connection* by Pamela Janes

## Kiiko Nagaoka

Among the numerous female philanthropists in Victorian England, Angela Burdett-Coutts is famous not only for her various kinds of charity work but also for her connection with Charles Dickens. They cooperated to improve the lives of the poor, and Urania Cottage, a home for fallen women, was the project which they poured their souls into the most.

This booklet is "an expansion of a lecture given by Pamela Janes of the Shepherd's Bush Local History Society at the West London Local History Conference", and includes important information such as the tithe record of property in Lime Grove from 1791 to 1821 and a list of the occupants of Urania Cottage taken from the 1861 census. Until now several biographies of Burdett-Coutts and innumerable biographies of Charles Dickens have been published, and the novelist's involvement with Urania Cottage has already been much discussed. The present leaflet will contribute to furthering Dickens' studies, both as a unique and compact guide to the local history surrounding the House and as a research work on the Dickens' view on people in desperate need.

#### 大阪学院大学外国語学会会則

- 第1条 本会は大阪学院大学外国語学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大阪学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、外国語学、外国文学の研究 を通じて学界の発展に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
  - 1. 機関誌「大阪学院大学外国語論集」の発行
  - 2. 研究会、講演会および討論会の開催
  - 3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
  - 1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で外国語 学、外国文学を専攻し担当する者
  - 2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の機関誌その他の刊行物の配布を受けることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選は2期までとする。
  - 1. 会 長 1名
  - 2. 副 会 長 1名
  - 3. 庶務·編集委員 4名
- 第8条 会長は会員の中から選出し、総長が委嘱する。

副会長は会長が会員の中から委嘱する。

委員は会員の互選にもとづいて会長が委嘱する。

第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。

副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。

- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 会長は会務執行に必要なとき、会員の中から実行委員を委嘱するこ

とがある。

- 第12条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。
- 第13条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金の他の収入をもってあてる。
- 第14条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。

本連合に関する規程は別に定める。

- 第15条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。
- 第16条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認をうるものとする。

#### 附 則

- 1. この会則は、昭和49年10月1日から施行する。
- 2. この会則は、平成3年4月1日から改正し施行する。
- 3. この会則は、平成13年4月1日から改正し施行する。
- 4. この会則は、平成24年4月1日から改正し施行する。
- 5. この会則は、平成25年4月1日から改正し施行する。

以上

#### 大阪学院大学外国語論集投稿規程

- 1. 投稿論文(翻訳を含む)は外国語学、外国文学に関するもので未発表のものであること。
- 2. 投稿資格
  - イ. 投稿者は、原則として本会の会員に限る。
  - ロ. 会員外の投稿は役員会の承認を必要とする。
- 3. 原稿は次のように区分し、その順序にしたがって編集する。論説、研究 ノート、翻訳、書評など。
- 4. 原稿用紙は、本学の200字詰用紙を横書きにし、枚数は原則として80枚を 限度とする。

ワードプロセッサー使用の場合は、A4判用紙を使用し、1ページを35字×27行とし、16枚程度までとする。

外国語文の場合はA4判用紙を使用し、5,000語程度までとする。

論文本文が日本語文の場合は300語以内の外国語文の、また本文が外国語 文の場合は900字以内の日本語文の、概要を付ける。

外国語による論文および概要は、投稿前に当該外国語母語話者による チェックを受けることが望ましい。

- 5. 発行は原則として、前期・後期の2回とし、6月・12月とする。年間ページ数は300ページ以内とする。
- 6. 抜刷は40部を無料進呈し、40部を超過希望の場合は編集委員会で超過費用 を決定する。
- 7. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。 なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望す る場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
- 8. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が、複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、平成25年4月1日から適用する。

#### 大阪学院大学外国語論集執筆要領

- 1. 原稿は最終的な正本とする。校正の段階でページ替えとなる加筆をしない。
- 2. 欧文は1行あきにタイプすること。
- 3. 邦文原稿の挿入欧文は、タイプもしくは活字体で明瞭に書くこと。
- 4. できるだけ現代かなづかいと当用漢字を用い、難字使用の時は欄外に大書する。
- 5. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
- 6. 注はまとめて本文の末尾に置くこと。

インデックス番号は上つきとして通しナンバーとする。その他の書式については、会員が所属する学外の学会の規程に準ずるものとする。(例えば、英文原稿の場合は、*MLA Hand book for Writers of Research Papers* に準拠すること。)

- 7. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、 本文中の挿入箇所を指示すること。説明文は別紙にまとめる。
- 8. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は厚手の台紙にはりつけて、希望の縮尺を記入すること。
- 9. 執筆者校正は3校までとし朱筆のこと。3校以前で校了してもよい。
- 10. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるのでとくに注意されたい。
  - ア. 校正のさい、内容に大きな変更は認められないが、やむをえず行って組 換料が生じたとき。
  - イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわる場合。
- 11. 原稿の提出期限は原則として9月末と3月末とする。
- 12. 原稿の提出先は編集委員あるいは図書館とする。
- 13. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し入れる。

#### 執筆者紹介 (掲載順)

山 口 修 経済学部 准教授

永 岡 規伊子 短期大学部 教 授

## 編集後記

本論集は、創刊40周年、70号の節目を越えて、また新たな道を歩み始めました。 少数の会員による小さな学会が定期的に論集を出し続けることは決して容易なこと ではありませんが、前号につづき、論文1本、翻訳1本を得てここに71号をお届け できることを嬉しく思います。

学術機関リポジトリでの公開開始から3年がたちました。薄緑色の表紙を開くかわりにコンピュータの画面をクリックするのが「学会誌を読む」ことになりました。リポジトリでの公開は世界的な流れでもありますし、学内・学外を問わず広く読んでいただけるなど、利点が多いのは言うまでもありません。しかし、かつて紙の論集が研究室に投函されたときの「お、出た出た!」感はすっかり縮小し、新しい号が出たことにしばらく気づかなかった、という方もいるのではないでしょうか。会員の皆様には、(ふるってご投稿いただくのはもちろんですが)刊行時期にはぜひ図書館のサイトをチェックしていただき、出たてほやほやの論集をご覧いただければ幸いです。

これまで3年以上にわたり熱意ある「尻たたき係」をつとめてくださった長岡会 長のもとでの学会活動も最終年度を迎えました。年度末に予定されている研究会と 論集がこれまで以上に活発な研究発表・議論の場となることを願っています。

(F. S.)

# OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

# FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES

## No. 71

Reconsideration of Gene Wolfe's "The Death of Dr. Island":	
The Meaning behind the Title	
····· Osamu Yamaguchi	1
Translation and Commentary	
The second half of Shepherds' Bush The Dickens	
Connection by Pamela Janes	
······ Kiiko Nagaoka	19

June 2016

THE FOREIGN LANGUAGE SOCIETY OSAKA GAKUIN UNIVERSITY